

〈報告〉④福島より

「震災の体験と学んだことを伝えたい」
その願いをどう共有するか

福島大学

学生 穴戸 結実 さん

こどもの記憶を 語り継ぐ

福島大学語り部団体 F.tellers

穴戸 結実

1. 自己紹介

名前 穴戸 結実（ししど ゆうみ）

所属 福島大学 行政政策学類

出身地 福島県伊達市

被災当時の年齢 小学校 1 年生（7 歳）



〈大学入学後の活動〉

1 年 地域実践学習「むらの大学」受講

2 年 川内村、大熊町の小学生の学習支援活動に携わる
防災士の資格を取得

3 年 福島県東日本大震災・原子力災害伝承者育成講座に参加

4 年（現在）

語り部団体「F.tellers（エフ・テラーズ）」設立、所属
シンポジウム参加、主に学生を対象とした語り部活動を行う

地域実践学習「むらの大学」

- ・ 福島大学が独自に行う学習プログラム
- ・ 大学の全学類、1年生を対象として開講（履修は任意）
- ・ 川内村、大熊町、南相馬市小高区、飯舘村の4班に分かれ、フィールドワークを通して地域を学ぶ。



出典 〈<https://www.fukushima-u.ac.jp/Files/2020/03/cocpanf.pdf>〉

福島県東日本大震災・原子力災害伝承者育成講座

- ・ 目的

「東日本大震災及び原子力災害の発生から14年が経過し、年々風化が進行する中、語り部の伝承活動の継続・拡大の重要性は一層増しています。その一方で、後継者の育成が課題となっていることから、複合災害の記憶と教訓を伝える語り部を育成するため、伝承者育成プログラムによるモデル事業を実施します。」

(福島県HPより引用：<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11055b/dennsyosya-ikusei.html>)

- ・ 講座は年4回実施（一部宿泊あり）
- ・ 参加者は10代～80代まで様々
- ・ 修了者は県の語り部として登録され、依頼を受けたのち福島県内外の防災事業や防災研修に派遣される

2. 現在取り組んでいること

①語りの内容を考える

②知識のアップデートを行う

③相手の語りから学ぶ

①と②について

- ・ 決められた時間は絶対に守ること

(学生→授業時間、バスツアー→バスが出発するまで)
相手の時間を頂いているという意識を忘れない

- ・ 話す相手を理解してから内容を構成する

子どもor大人、県外or県内、震災（被災）の記憶があるorない
使用する言葉や紹介する出来事を選ぶ
事実や数的データは正しく説明する

③について

話を聞いて「あの頃は…」 「実は私も…」と言葉をかけてく
ださる方がいる

語りによって思い出される語り（語りの連鎖）

語りの例

対象：福島県在住の大学1年生

時間：25分

聞き手に震災当時の記憶があるか聞いてから話をはじめる

1. 自己紹介（東日本大震災・原発事故についての説明）
2. 震災発生当時何をしていたのか
3. 原発事故後の生活（私の視点）
4. 父と母が支えた日常（親の視点）
5. 震災と原発事故が奪ったものは何か
（現在からの振り返り）
6. なぜ私が語り部になったのか

質疑応答（10分）

実際に使用したスライド

目次

1. 震災発生、そのとき私は
2. 原発事故が変えた「当たり前」の生活
3. 父と母が支えた「当たり前」の生活
4. 震災と原発事故が家族から奪ったもの
5. 私が「語り部」になった理由

←はじめに目次を出す

2. 原発事故が変えた「当たり前」の生活

増える授業
減る授業

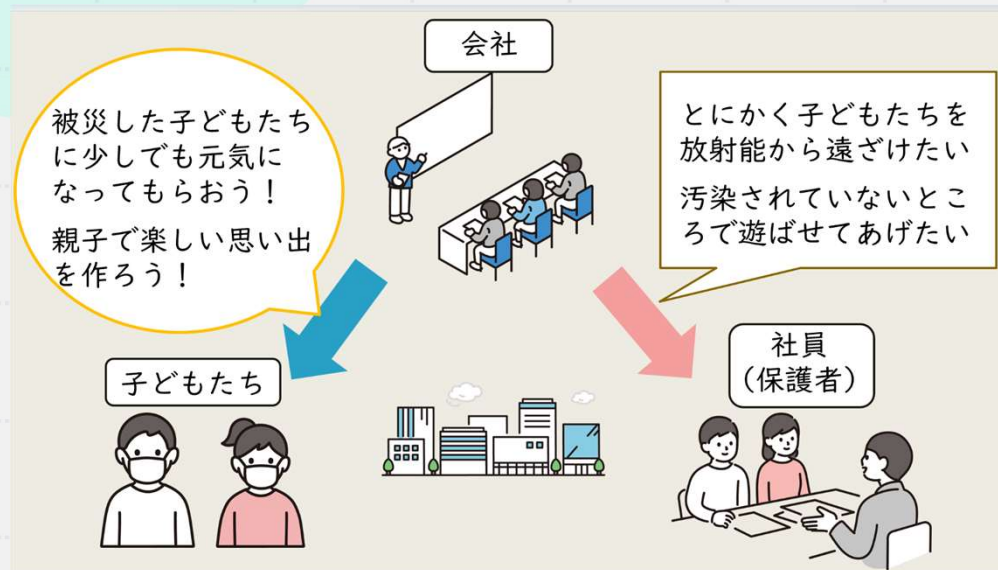
知らない言葉が
常識のように
飛び交う世界



コロナ禍の生活を思い出して聞くと
わかりやすいと思います

←結論を述べてから
語りは始める

実際に使用したスライド



←イラストや
アニメーションを使用



←原発事故後の写真
(2012年)

3. 活動を通して得られた学び

当時子どもだった世代だからこそ
伝えられることがある

聞き手の学生から「そういえば」が
出てくる



子どもの話だからこそ生まれる感情
過去の災害が未来の防災につながる可能性

子どもだったからこそ覚えているもの

学校の授業が放射線量検査に置き換えられた
除染が進まず畑が使えなかった

など

学校という閉鎖空間で行われていた教育

→大人でも知らないことがある

もしも将来大災害が発生して、子どもたちが同じような被害に遭ってしまったら…

⇒ **当時の記憶（記録）を語ることで未来の子どもたちの環境を守る**ことにつなげることができる

学生からの「そういえば…」

大学1年生を相手に語ったあとのこと

「そういえば、私も小さい時親に県外へ連れていかれて遊んだ覚えがあります」

「そういえば、運動会は室内でやりました」

「ガラスバッチ（小型放射線量計）を入れていたチャック袋、開けるなって言われてたんですけど、開けたくなくなりました」

私の語りが相手の記憶と結びついた
語りが新たな語りを呼び起こす（語りの連鎖）
⇒ **伝承に幅を持たせる** ことにつながる

4. 今後の課題

記憶の曖昧さをどのように補完するか

自身のライフイベントと「語り部」



若い世代ならではの悩み
福島県に限った話ではない

記憶の曖昧さの補完

育成講座で直面した課題

- ・今まで話す機会がなく、当時の記憶がおぼろげ
- ・震災当時の写真が残っていない

→自分一人の視点で全てを語ることはできない
頼りになるのは「親の記憶」

それでも…



それは嘘だ
その記憶は間違っている

親が元気なうちにどれだけ話を聞きだせるか
自分の譲れないものはなにか

ライフイベントと語り部活動

大学卒業→就職→結婚→妊娠・出産→子育て→復職
→勤務…

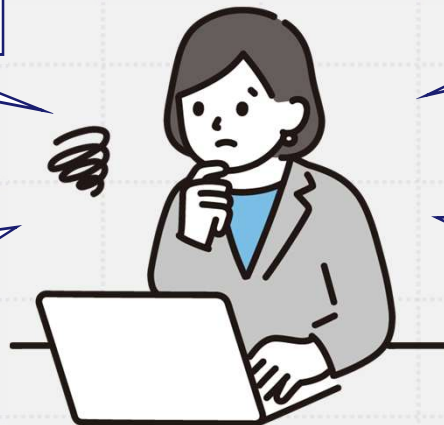
その他 転職、転勤、昇進など

「福大の学生」では
なくなった時どうなる？

仕事と両立できる？

職場は活動を認めて
くれる？

県外に行ったら
どうなる？



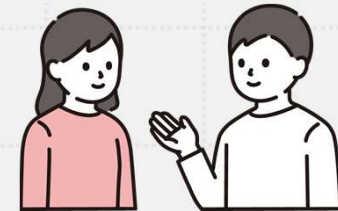
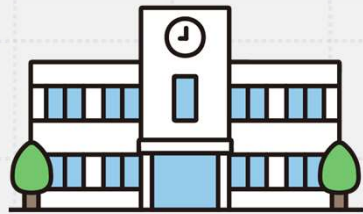
ガクチカで終わらせたくはない！

5. 私が考える 「災害に向き合う教育の未来」

事実の教育



感情の継承



2つの事象が手を取り合い
聞き手が災害を自分事として受け入れたとき
リアリティをもって防災学習に取り組めるようになる
のではないかな

ご清聴ありがとうございました！